Padmanabh S. Jaini,

Subodhālaṅkāra, Porāṇa-ṭīka (*Mahāsāmi-ṭīkā*)

by Saṅgharakkhita Mahāsāmi, *Abhinava-ṭīkā*

(*Nissaya*) (anonymous)

茨田通俊

Padmanabh S. Jaini 博士が、Pali Text Society から *Subodhālaṅkāra* というあまり馴染みのない名前のテキストを出版した。Jaini 博士は、ジャイナ教を初めとする広範な研究に加え、テキストも幾つか手がけているが、本書はその最新の成果である。これは、パーリ語文献としてはきわめて珍しい修辞学のテキストであり、その意味でここに紹介する意義は大きいと言える。もっとも筆者は、修辞学に関して全くの門外漢であるため、ほとんどを Jaini 博士自身の序文に従って、本書の紹介を行いたいと思う。

本書の序文では、まず出版に至る経緯が示されている。*Subodhālaṅkāra* については、英領ビルマ副弁務官の G. E. Fryer 少佐の論文（一八七五）、G. P. Malalasekara の著作（一九二八）によって、類書の存在が知られていた。また、K. D. Samadasa は、自らのスリランカのパーリ写本目録（一九五九）で、*Subodhālaṅkāra* について *ṭīka* 七写本、*nissaya* 五写本を記載している。

こうした情報を頼りに、Jaini 博士は一九六一年、東洋アフリカ研究学校の研究休暇を利用して、自らミャンマー（ビルマ）とタイに赴く。未出版のパーリ写本の収集を目的とする旅で、Samadasa が記す二注釈の写本の新たな発見に期待を寄せていた。ところが、その際ヤンゴン（ラングーン）で、かなり以前に Sīlācāra というビルマ人長老が、二つのパーリ語の注釈と一緒に *Subodhālaṅkāra* を出版していたことを知るに至る。ビルマ文字で書かれた、約二九〇頁から成るこの貴重本は、一九二八年の出版で状態が非常に悪かったが、幸いそのコピーを入手することができた。それは、パーリ語で書かれた二つの散文の注釈を含んでいた。一つは、偈頌の著者 Saṅgharakkhita に帰する *Porāṇa-ṭīkā* と呼ばれるもの、もう一つは著者不詳で、ただ *Nissaya* と呼ばれ、編者によって *Abhinava-ṭīkā* と名付けられたものである。

そして *ṭīkā* と *nissaya* の写本を手に入れる機会を待っていた一九八〇年頃、第六結集（Chaṭṭha-Saṅgāyana）で編纂されたパーリ聖典及び注釈文献を出版した Buddha Sāsanasamiti of Burma が、二つの注釈の付いた *Subodhālaṅkāra* を一九六四年に世に出していたことがわかった。よく知られているように、第六結集版はビルマ国外へは配されなかったし、見ることさえめったにできないのだが、幸いコペンハーゲンの *The Critical Pali Dictionary* のオフィスでコピーが見つかった。

Jaini 博士が、Sīlācāra と第六結集版（タイトルは

Subodhalaṅkāra-ṭīkā）の両テキストを比較したところ、前者には誤植が多く見られるものの、後者に記されていないかなり多数のヴァリアントが存することが知られた。それに対して第六結集版は、ヴァリアントが充分に参照されていない。本書は、第六結集版に基づいた *Subodhālaṅkāra* のローマ字版であり、全三六七詩句の各々に対して、*Poraṇa-ṭīkā*, *Abhinava-ṭīkā* という二つの注釈が並置されている。Sīlacāra 版に見られるヴァリアントについては、脚注に示されている。

著者 Saṅgharakkhita は *Subodhālaṅkāra* の冒頭で、古来サンスクリットで書かれた詩論に関する作品は、パーリ語を使う仏教僧等には有用ではない、と述べている（p. 7）。そこで彼は、マガダ語しか知らず、サンスクリットやプラークリットに熟知していない人々を意識して、このような修辞（alaṅkāra）に関する論書を提供しようと考えたのである。その意味で、言わば「易しい修辞法」である *Subodhālaṅkāra* は、パーリ文学における先駆的業績であることは疑いない。

Subodhalaṅkāra は、以下の五章から成っている。

第一章　Dosāvabodha　作詩上の欠陥（例えば論理的矛盾、類語反復）

第二章　Dosaparihārāvabodha　欠陥の忌避

第三章　Guṇāvabodha　作詩上の美質（例えば愉快、優雅）

第四章　Atthalaṅkārāvabodha　修辞的表現（例えば直喩や隠喩）

第五章　Rasabhāvāvabodha　詩的情趣（例えば恋愛、勇猛等）

偈頌の作者 Saṅgharakkhita 及び二つの注釈を巡る問題について検討することは、本書の性格を知る上で重要である。

Subodhālaṅkāra の作者 Saṅgharakkhita については、前述の Malalasekara の著作『セイロンのパーリ文学』の中で触れられている。それによると、Saṅgharakkhita は、Parakkamabāhu 一世（一一六五～一二〇二）の治世に Sāriputta 大長老の集団に属したシンハラ人の長老で、*Subodhālaṅkāra* に加えて、*Vuttodaya*（パーリ詩形論の解説書）、*Sambandhacintā*（統語論におけるパーリ語の動詞とその用途に関する学術書）、*Khuddasikkhā-ṭīkā* と呼ばれる *Vinaya* の注釈書等数作品の著者と考えられている。残念ながら、それ以上のことを知ることはできない。そしてこの *Subodhalaṅkāra* 自体が、著者と彼の他の業績に関する情報を何ら提供していない。Jaini 博士は、*Subodhalaṅkāra* が著者の最初の作品だったからであろうと推測している。

ところで、各章の最後にある奥書が、Mahāsāmi（偉大なる指導者）という重要な称号を著者の名前に付け加えて、Saṅgharakkhita-Mahāsāmiviracite Subodhalaṅkāre としていることに、Jaini 博士は注目している。これが高尚で敬意を込めた称号であることは間違いなく、Saṅgharakkhita 自身が他で師 Sāriputta のために使用するものとされる。

実はMahāsāmiという称号は、*Porāṇa-ṭīkā*の全五章の末尾に現れ、この注釈の名称Subodhālaṅkāre Mahāsāmināmikāyaṃ ṭīkāyaṃも構成している。*Mahāsāmi-ṭīkā*（*Porāṇa-ṭīkā*）の最後に奥書こそないが、この*ṭīkā*の著者が*Subodhālaṅkāra*の偈頌を書いたSaṅgharakkhitaと同一人物であることを示すのに十分な根拠をJaini博士は指摘している。即ち、*Porāṇa-ṭīkā*のpajjaṃという語の注解で、「*Vuttodaya*と呼ばれる我々自身の作品で述べられる韻律に一致するものである」と述べていることから（p. 24）、詩形論に関するSaṅgharakkhitaの過去の作品に論及する以上、*Porāṇa-ṭīkā*の作者が彼自身であることは明らかだというのである。

どういうわけか*Mahāsāmi-ṭīkā*というタイトルは、伝統的にあまり知られてこなかったようである。代わりにSīlācāraがそれに当てた名前が*Porāṇa-ṭīkā*（古注釈）である。

さて、*Subodhālaṅkāra*のもう一方の注釈についてであるが、先述したようにSīlācāraが使った写本には*Abhinava-ṭīkā*というタイトルが付いていない。先の"*Mahāsāmi-ṭīkā*"に対して、この注釈は自身の名前を持たず、それはただ*Nissaya*と呼ばれるだけである。やはりこの注釈にも五回現れる*Mahāsāmi-ṭīkā*という名称は、ここでは使われない。

二つの*ṭīkā*のうち一つは、本文である*Subodhālaṅkāra*の著者によるものであるという事実からすれば、おそらくまずSīlācāra（あるいはあるもっと以前の写字生）がPorāṇa（古い）-ṭīkā、Abhinava（新しい）-ṭīkāというタイトルを使い、後に第六結集版の編者が同様に踏襲したのであろう、とJaini博士は推測している。

著者の名前と作成年代を示すような奥書は、*Abhinava-ṭīkā*（即ち*Nissaya*）には存在しない。章の終わりにただSubodhālaṅkāra-Nissayeと記されるだけである。ただし、Sīlācāraと第六結集版の編者は、ビルマのNarapati王の治世（一四四二～六八）に、この*Nissaya*の著者であるDhammakitti-Ratanapajjotaと呼ばれる有名なビルマ僧がいたという言い伝えについて述べている。それによると、このビルマ僧はスリランカを訪ね、そこでSaṅgharakkhita自身によって書かれたと伝えられるシンハラ語の注釈*atthabyākhyā*を発見、この作品をマガダ語に翻訳し、ビルマに持ち帰った。以後それは「スリランカ帰りの長老」（patta-Laṅkatthero）という名で知られている。この伝説はSīlācāraと第六結集版の編者の両方に固く信じられているため、Dhammakitti-Ratanapajjotaの名前が*Abhinava-ṭīkā*の作者として両版の扉に現れるのである。よって彼を著者としてよさそうなものだが、Jaini博士は、大部の*Mahāsāmi-ṭīkā*を既に著したSaṅgharakkhitaが、より大きな*atthabyākhyā*を新たな課題も付け加え、しかもシンハラ語で世に出すなどとは信じ難いとして、*atthabyākhyā*をDhammakitti-Ratanapajjotaに帰することに難色を示している。

nissayaという語は、伝統的にテキストの合成語の言い換えと分析を行う作品に当てられる。*Abhinava-ṭīkā*では、

Subodhalaṅkāra のほとんどすべての詩句について、そうした形の論評がなされている。したがって学生の補助、*nissaya* と見なされたのかも知れない。

ところで、既に広大な注釈 *Porāṇa*（*Mahāsāmi*）-*ṭīkā* が存在するにもかかわらず、*Subodhalaṅkāra* に関する全く新しい注釈として *Abhinava-ṭīkā* を著す必要性が果たしてあるのだろうか。*Abhinava-ṭīkā* は、Saṅgharakkhita の学識に対する惜しみない称賛で始まり（p. 3）、その名前と称号を Ācariya-Saṅgharakkhita-Mahāsāmipāda という形で表している。しかし、不思議なことには、*Mahāsāmi-ṭīkā* というタイトルは言うまでもなく、Saṅgharakkhita が *ṭīkā* の著者であることも一度たりとも明らかにしていないのである。

もっとも *Abhinava-ṭīkā* の中には、彼の関与を裏付ける幾つかの例が見られる。例えば、第一〇六偈について注釈する際に、「師（ācariya）は簡略を望む（saṅkhepakkamam icchanto）一方で、・・・実例を挙げることによって詳細に論じる」と記しており（p. 114）、それに応じたものとして、時には *Porāṇa-ṭīkā* が簡潔に書いている所を *Abhinava-ṭīkā* では拡充していたり（p. 98）、また *Porāṇa-ṭīkā* が注釈していない時に、*Abhinava-ṭīkā* がかなり詳しく論じていたりする（p. 234）ことがある。

さらに最終章で、rasa（詩的情趣）について説明するために、おそらく著者の自作と思われる、*Vidhurapaṇḍita-jātaka* の物語に基づいた九つの詩句を著す点（p. 292）を、*Abhinava-ṭīkā* の最も独創的な部分として、Jaini 博士は紹介している。以上のような特色によって、*Abhinava-ṭīkā* が Saṅgharakkhita の「古」注釈 *Porāṇa-ṭīkā* に匹敵する地位にあることが確かめられるのである。

ただし、写本においてこの作品に当てられた "*Nissaya*" というタイトルについての謎は、依然として残っている。Jaini 博士は、*Abhinava-ṭīkā* の著者は、本来は学生の教育のために、*Subodhalaṅkāra* の詩句の詳細な分析を計画したに過ぎないのだろうが、この目的が叶った結果、*nissaya* として広く知られるに至った、という可能性を指摘している。さらに、準備している過程で著者が視野を広げた結果、「古」注釈の大部分を意図せずして理解することによって「新」注釈を創造したのではないかと考える。その理由として、*Abhinava-ṭīkā* で取り上げる課題が *Porāṇa-ṭīkā* の反復になっていること、中略（peyyāla）を多用する引用詩句は *Porāṇa-ṭīkā* からの転用であると考えられ、そのために異読が存在しないこと等を挙げている。

Subodhalaṅkāra の作成に当たって、Saṅgharakkhita が他の著作を参照し、それらに何らかの影響を受けたことは想像に難くない。Jaini 博士はそのあたりを探ると共に、Saṅgharakkhita の独創性についても明らかにしている。

博士によれば、なかでも影響が大きいのが、修辞学に関する最も有名な典籍、Daṇḍin の *Kāvyādarśa* である。*Subodhalaṅkāra* の三つの詩句（第八、二十六、一六八偈）は、各々 *Kāvyādarśa* の一―二、三―一、二―四の改作であり、そうしたパーリ語に

換えられた *Kāvyādarśa* の詩句が、*Poraṇa-ṭīkā* には二十五もあることが指摘される。これらは脚注に示されている。

第二章の最後、第一一五偈で、Saṅgharakkhita は幾つかの他の典籍に従ったと言っているが、名称は何ら挙げていない。*Abhinava-ṭīkā* で述べられるところによれば、それらはすべて仏教以外のものとされる（pp. 118-119）。また、第四章の最後で過去の師たちについて語っており、*Poraṇa-ṭīkā* の相応箇所では、彼がその作品に親しく従った Daṇḍin 等の名前を挙げている。さらに *Abhinava-ṭīkā* には、Bhaddapaṇa というさらに別の名前が見られる。これは、名高い *Dhvanyāloka* の著者 Ānandavardhana に相当する Bhaddaṇa（Skt. Vardhana）の短く崩れた形のようである（p. 270）。

Daṇḍin からの影響は確かだが、Saṅgharakkhita は、*Kāvyādarśa* の構造から外れることで独自性も発揮している。*Kāvyādarśa* と違って彼の作品は、作詩上の欠陥の一覧で始まっている。それは一般に他の作品では末尾に来る課題である。また、Bharata の *Nāṭyaśāstra* において主要な課題を成す rasa のような一定の領域は、Daṇḍin の *Kāvyādarśa* では扱わない。Saṅgharakkhita はこの課題の重要性を理解して、最後の章をそれらの概説に割いている。そこで、世間一般の用法に従う詩人は rasa の多様性についても知るべきであると説いている。

Saṅgharakkhita は、各々が rasa に充当する精神の状態（bhāva）、誘因（vibhāva）、付随的状態（anubhāva）といった術語ついて詳説している。確かにこれらは、Bharata の *Nāṭyaśāstra* に根本的起源があるに違いない。しかしながら、*Poraṇa-ṭīkā* で彼は、Bharata が理論化した八つの rasa に加え、九つめの rasa として śānta（寂静）を挙げ、Mammaṭa の *Kāvyaprakāśa* を示して、śānta もまた rasa としての資格があることを主張する。

Saṅgharakkhita は、修辞法の特徴について実例入りで述べるつもりであったようだが、*Kāvyādarśa* を含めた修辞学に関する作品の中に、彼が適切な実例を見つけたということはなさそうである。したがって実例は、しばしば月のような顔、輝く爪等の仏陀の容姿、あるいは降魔成道のような仏伝、ジャータカの物語からの引用といった仏教の権威に基づいたものになっている。

Saṅgharakkhita の *Subodhālaṅkāra* は、著者自身の注釈 *Poraṇa-ṭīkā*、さらには *Abhinava-ṭīkā* と共に、パーリ文学史に独特の位置を占めている。比肩し得る作品は以来世に現れていない。そのことを認めながらも、Jaini 博士は最後に、サンスクリットで書かれた権威ある典籍 *Alaṅkāraśāstra* との比較研究を提言している。筆者もまた、本書を利用して今後新たな研究の発展があることを切望する。

（Pali Text Society, Oxford, 2000, xx ＋ 316 Pages）